若年性認知症相談支援センター（コーディネーター）の支援事例　2

事例項目	②経済的支援　③就労支援
内容	〔相談を受けたきっかけ〕 ● 島根県西部地区に若年性認知症支援コーディネーターが配置され、本人が専門病院の案内で西部地区若年性認知症カフェに参加された。 〔相談者背景〕 ● 女性（50 代後半）、夫、子供二人の４人家族。 現在、長女と二人暮らし。 ● 受診のきっかけは職場からの助言。 ● 歩く計算機と言われていたが計算が出来なくなり、職場や自身の負担を考え正規からパート職員に配置転換を申し出た。 ● パート職員に雇用条件が変更したことにより精神的負担は軽減したが、経済的な負担が増大した。 ● 仕事内容は窓口対応、環境整備ほか雑務。 〔支援内容〕 ● 配置転換による経済的な不安に関しては、本人に障害年金の申請、障害者手帳、自立支援医療等の手続きなど支援。 ● 就労に関して、職場上司と現在の雇用状況、今後の雇用態勢に関することなど意見交換。その中で、両立支援助成金制度、ソフトランディング（ゆっくりと変化する症状や能力に応じ、寄り添って支援）についてなど説明し協力を得る。 ● 本人の友人、知人とも情報交換など協力しながら、状態に応じた支援を実施。 〔支援しての所見〕 ● 本人にとっては周囲から支援されているとの意識。 ● 友人にとっては自分たち以外に協力者がいることの心強さなど感じている様子。 ● 本人を中心に理解者や支援体制が整っていると思われる。 ● 明らかに本人の症状が低下しており同居している娘の介護負担の軽減、及び心理的支援が課題となっている。
ポイント	● 症状が進行しないために本人が一番望ましいと思っている就労についてソフトランディングを念頭に継続的支援を行うことを職場管理者に理解を求める。 ● 経済的な不安を解消できるように様々な社会保障、制度保証について説明し支援に繋げる。 ● 医療、包括支援センター等関係機関、友人、知人、職場との連携協力を得る。